

# Liver pathology and me

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/8477">http://hdl.handle.net/2297/8477</a>

## 肝臓の病理はおもしろい

Liver pathology and me

金沢大学医学部第二病理  
中 沼 安 二

いろいろなきっかけや動機で研究テーマが見つかる。私の場合、大学院の時にもらったテーマである肝臓の病理の研究を、幸いにも20年もの間続けている。各々の研究テーマに共通して言えることであろうが、私が一生のテーマとしている肝臓の病理はとにかくおもしろい。

肝臓は、図体は大きいですが、肉眼構造が比較的単純で、病理解剖も大ざっぱな記述で十分に通用する。臓器の中では、一番扱いやすい。しかし、最近、画像診断学が著しく進歩しているので、時々、放射線科の先生に病変の解剖学的局在や性状を厳しく追求されるが、それでもなんとかわせる程度の簡単な構造であり、多くの場合、それ程、深刻に考えなくても済む。

肝臓は、成人で大体1300gと大きく、また種々の中間代謝や免疫系に深く係わっているのです。剖検例、生検例で必ず、なにがしかの病変、病変あるいは所見が見つかる。だから、どんな症例でも、楽しみを持って標本をみれる。生活様式や時代の変遷に伴い、いろいろな病変が盛衰するが、殆どの場合、肝臓は不幸にも病変に巻き込まれるので、勉強、研究するのに事欠かない。逆に、本当の意味で正常肝はないので、研究上、対照の設定に困ることがあるがこれは仕方がない。

肝臓には慢性疾患が多い。20年も研究していると、その患者がどのような経過を辿り、病変がどのように進展するかを知ることが出来、学問的興味を十分に満足させてくれる。その時、その時で診断名さえ変わる症例もある。病理学的な経過観察だけでも、貢献度の高い論文を書くことが出来る。時々、慢性の肝疾患の患者を食い物にし

て生きているのではないかと錯覚する位である。

肝臓は、ミクロでは役者が豊富で、病変毎にいろんな劇を演じてくれる。顕微鏡を見ていても飽きないし、さらに、学問の進展や時代の変遷に伴い、肝臓病を構成する主役がしばしば入れ替わる。例えば、最近まで、肝小葉では肝細胞が主役だったが、現在、分子生物学の著しい進歩と共に、わき役に過ぎなかった肝類洞壁を構成する細胞達の株があがり、今では肝疾患の主役になろうとしている。また、肝疾患そのものも変化する。C型肝炎ウイルスの発見で、今まで上位につけていたアルコール性肝疾患が、かなり下落した。逆にC型肝炎の類縁疾患として自己免疫性肝炎の復活が著しい。

最近、肝炎ウイルス(A, B, C, D, E)の相次ぐ発見と血清診断の開発と一般化に伴いウイルス肝炎の診断が容易になったことと、肝細胞癌の境界病変の病理診断に際し病理医相互間での不一致が露呈したことで、肝臓病学での病理医の立場は少し、低くなってきた。しかし、それでも、肝疾患の診断の殆どは病理学的になされるので、学会でもそれなりの顔が出来る。また、肝疾患の検査成績や画像の読みは、実際はそれ程難しくないのです。臨床の学会でも臨床の演者の言っていることが十分理解出来るし、臨床医と十分にディスカッションを楽しめる。

幸い、北陸地方には肝臓を専門にしている臨床の先生が多いので、これからの20年間も、肝臓の病理を楽しめそうである。